

『東方』三〇二号より

生々しい農村「悪覇」幹部の実態

清水 美和（東京新聞）

本書の舞台になった安徽省の南部を中国の友人と一緒に旅したことがある。ある村の小さな食堂で食事をしていたら、突然、人相風体の悪い男たちが、どやどやと入ってきて、酒を飲んで騒ぎながら食事を始めた。

店の人がいかにも嫌そうに給仕しているので「彼らは一体何者なんだ。一応、客なんだから、もうちょつとサービスしてやつてもいいじゃないか」と聞いたところ、その村の幹部だという。店の人の話によると、幹部たちはしょっちゅう来ては大騒ぎして、カネは一切払わない。それだけではなく、店にないタバコや酒を店の者に買いに行かせてその金さえも払おうとしない。とにかく、そういう連中が来るのが嫌ではないという。

中国では一九九〇年代末から農村選挙が始まり、末端の自治組織である村民委員会の幹部、日本風にいえば村長などは、住民の直接投票で選ばれるようになった。農村幹部の「作風」も少しは変わったのではないかと聞くと、店の経営者は、「いや、村の幹部はだれがなつても同じだ。なまじ人が換わると、そのたびにたかられる。だから、人は換わらない方がいい」と話していた。

その地域は安徽省の中でも比較的豊かな方と聞いたが、村々に医療保険は普及していない。農民たちに病気になるかどうかと聞いたところ、この辺りは空気も水もきれいで病気にはならない、なつても薬草がいっぱい生えているので心配ないという答えだった。村々を回る道すが

トップページにもどる

陳桂棣・春桃著／納村公子・梶田雅美訳
『中国農民調査』

A5判・三〇四頁・文藝春秋・二、九〇〇円



ら、地方政府から派遣された農村医療保険宣伝隊に出会った。

農民たちに一定額を拠出させ、政府が基金を上積みして医療保険をつくると宣伝していた。しかし、宣伝隊の人たちに聞くと、農民たちは全くカネを出したがらず、さっぱりカネが集まらなかつた。農民たちは、政府の幹部に少しでもカネを渡せば横領されると信じ込んでいるという。短い旅の中でも話に聞く農村幹部の実態は、我々の想像を絶するものがあつた。

安徽省の省都、合肥市に住む著者の陳桂棣・春桃夫妻は二〇〇〇年十月から、二年の歳月と自費五万元（約七十万円）を費やし省下七十県のうち、五十余県を訪ね歩いた。夫妻が見た農村幹部の専横は中国人である彼らにとつても驚きの連続であつた。夫妻は農村幹部の横暴を調べ上げ、省のトップ級を含む数百人の幹部の実名を挙げ生々しく実

態を描いた。中国はもちろん西側諸国でも例を見ない勇氣あふれる著作だ。いくつかの例を挙げるだけでも、幹部の農民に対する迫害、暴力のすさまじさがうかがえる。

安徽省西北部の利辛県路営村は貧困を極め九三年当時、村人一人当たりの年平均収入は四百元に満たなかった。しかし、村幹部は様々な名目の税金や手数料を一人百元以上も支払うよう要求した。明らかに中央政府の政策に反する仕打ちに対し、農民の丁作明は大衆を率いて上級の政府に陳情する活動を始めた。

このため副村長は、ささいな傷害事件を口実として警察に丁作明を拘束させ、派出所で暴行の上、殺害した。村人三千人が抗議に立ち上がったが、当局は村外への情報流出を阻止し、中央政府に報告が達しないよう画策した。事件後に新華社が党内向けの出版物で報道し、北京から調査チームが派遣され関係者は処分された。

同じく西北部阜南県潘寨村の共産党支部書記は九五年一月、弟や「防衛隊」と称する男ら十六人とともに、獵銃や棍棒を持って村への納税に応じなかった農民の家に押し掛け、食糧の差し押さえに抵抗した農民を銃撃して重傷を負わせ、彼の祖父を殴り殺した。

事件は中央テレビの報道をきっかけに中央政府も知ることになり、支部書記は逮捕された。阜陽市の裁判所で支部書記に死刑判決が下された時、中央テレビの取材班が現地に入り村人の声を聞こうとした。実態が暴かれ責任を問われるのを恐れた阜陽市の党書記は取材班に女性を紹介し現地に行くのを阻もうとしたが、取材班は拒否して村に入った。

こうした悪質な地方幹部にとって時に行われる中央政府指導者による農村視察は、悪事が露見しかねない危険な時

トップページにもどる

である。そのため、あの手この手で中央指導者の目をごまかすことになる。

鳳陽県小崗村は中国農村改革の発祥の地として知られていたが、改革・開放二十年を経ても農民の暮らしは貧しく、村の様子は以前と大差なかった。しかし、改革・開放二十周年の一九九八年、江沢民国家主席が、この地を訪れることが決まると、安徽省共産党委員会の幹部は六月に自ら省各部門の責任者を引き連れて村を訪れ「驚天動地」の建設工事を始めた。

教育部はこの村に百六十人の先生や生徒を収容できる小学校を建設し、建設庁や水利庁は給水塔を建て村人が上水に不自由のないよう工事した。家々の壁は塗り替えられ、村全体が光り輝くような有様に一変した。それまでトイレは共用しかなかったのに、各世帯に新設され、電話機も配置された。さらに省林業部は五十キロ離れた山林から八百三十本の木を買って、この村の路側に植えた。この工事にはおよそ二百七十万元(約三千八百万円)が投入され、村は生まれ変わった。この年の九月二十二日に江沢民がこの村を訪れたとき、村人たちは、この降ってわいたような恩恵は国の最高指導者が村を訪れるお陰であると初めて悟った。

その厳しきで役人を震え上らせた朱鎔基首相も、この年の五月に南陵県で政府による農民からの食糧買い入れ状況を視察に訪れることになった。朱は過去五回、安徽省を訪れていたが首相の身分で訪れるのは初めてだった。省の食糧倉庫には食糧がなかったため地元の幹部たちは何とかうわべを取り繕うと、五月十八日から大量の人員と車を動員し各地から千トン以上の食糧を倉庫に搬入した。当時、倉庫に向かう自動車の列は絶えることなく周囲の住民は徹

夜で行われる搬入作業で眠ることもできなかったという。朱首相の視察当日には倉庫のすべての職員は倉庫に入ることが許されず、倉庫の責任者も急ぎよ、上級政府の幹部に交代させられ、良いことばかりを並べた資料が用意された。五月二十二日に朱首相は倉庫を訪れたが、この中に本来の倉庫職員が一人もいないとは思ってもよらなかった。視察の様子は中央テレビを通じて国内外に報道され、朱は省の面々を前に、この地域では中央の政策を厳格に執行しているとはめたたえた。

しかし、地方幹部が北京の客を欺くことを見抜いた中央指導者もいる。

九六年五月、当時党中央書記処書記だった温家宝(現首相)は霍山県の貧困地帯を訪れた際、地元幹部が想定していない場所で車を止めさせ「トイレに行く」と言いつて秘かに近くの村を訪れた。そこで住民の話を聞いて、この地域では学校の先生が給料さえ支払われず、農民が食べる食糧もないことを知った。地元幹部は温が農家を訪れたことを知らず、良いことばかりを報告したが温はたちどころに嘘を見抜いた。

また、温が龍河口ダムの決壊による洪水の状況を視察したとき、幹部は比較的豊かな村に案内し、貧しい村に行く道は通行止めで迂回しても十キロ以上あると言いつて視察を阻止しようとした。しかし、温はどうしても訪れると言いつて聞かず地元の幹部も同意するほかなかったという。

農村幹部と村人の抗争の事実は九〇年代末から党の内部文書や地方の小新聞では報じられてきたが、一省をくまなく調査した結果が幹部の実名人りでまとまって明らかにされるのは、これまでに例がなかった。二〇〇三年三月に発足した胡錦濤政権が農村対策を「重点中の重点」とし幹部

トップページにもどる

の横暴を戒めるキャンペーンを強めた背景の下で、初めて出版が可能になったのは間違いない。

『中国農民調査』は二〇〇四年一月、出版され国内外で話題になったが、反響の大きさに驚いた党中央宣伝部は、わずか二カ月で発禁処分にした。文中で実名を挙げられた幹部が著者夫妻に対し「名誉棄損」で二十万元(約二百八十万円)の損害賠償を求める裁判を起こすなど逆風も強まった。

しかし、本書が発売した農民の重い負担、幹部の腐敗には農民たち自身による絶え間ない告発が続いてきた。デモや騒乱、集団陳情など農民による「集団性事件」は一九九三年から二〇〇三年の間に約一万件から六万件、参加人数もおよそ六万人から七十三万人に増えているという(公安部による)。

農民の「反乱」を恐れた胡政権は二〇〇六年一月から主な負担だった農業税を全面的に取り消し、二千年以上にわたる「年貢」(国営新華社)の歴史に終止符を打った。しかし、これが農民負担の本当の軽減につながるかどうか、まだ成果は未知数だ。

〇六年二月に公表された党中央〇六年一号文件「中共中央、国務院の社会主義新農村建設に関する若干の意見」は、農民負担を強いてきた郷・鎮政府を「事業ステーション」に変え、郷・鎮政府が負担してきた義務教育費を中央や省・県政府の負担とし、農民に負担を求めない方針を打ち出した。

しかし、これまで末端の権力として農民に君臨してきた郷・鎮政府の幹部たちが、やすやすと権力を明け渡し農民に対する行政サービスに徹することができだろうか。また、これまで農村の税金・費用の改革は、みだりに農民か

ら徴収してきた行政費用を税に一本化し、全体として負担を軽減する「費改税」の方針で進めてきたが、税金の撤廃は新たな行政費用の農民に対する強要、「税改費」という改革の逆行を生み出さないと限らない。

たとえば、郷・鎮政府の撤廃に成功したとしても肝心の村の中での幹部と農民の関係に変化はあるのだろうか。『中国農民調査』は末尾に非常に印象的なエピソードを書き加えている。取材も終わり、協力してくれた農民たちからの電話や手紙を受け取った著者夫妻はある手紙に自分の目を疑った。臨泉県白廟鎮王営村の農民から村民の権利を犯す幹部の批判に続き「党支部書記王俊彬の非道を訴える」という一文がつづられていたためだ。

王俊彬こそ、農民に対する重い負担を訴えて大勢を引き連れ北京に直訴に行き、投獄や党籍剥奪を経験した農民リーダーであった。その後、訴えが認められ党籍を回復し村の党支部書記となった王が、なぜ直訴される側になったのか。

「いま中国に残る旧体制は『底なし沼』のように、いったんはまったら最後、人間を変えてしまうのだろうか」

著者たちの問いは農村幹部の腐敗を告発する中から、現実には中国歴代王朝の農民支配を引き継いだ共産党政権による統治の矛盾に迫っている。それこそが、胡政権の農民重視を支持する立場から中央の政策に従わない地方幹部の腐敗を告発した本書が、発禁にされた本当の理由かもしれない。

トップページにもどる